

『ゲンロン 6——特集 ロシア現代思想 I』
『ゲンロン 7——特集 ロシア現代思想 II』

ゲンロン, 2017年9月, 12月

坂庭 淳史

2017年は「ロシア革命100年」を記念して様々な書籍が刊行され、雑誌特集が組まれた。私はこの年の4月から8月末まで4か月ほどをロシアで過ごしたのだが、ロシアに来てみるとどうもピンと来ない。町なかでは「1917年」という言葉を見かけることはなく（現代史博物館の「革命コード1917」という展示が、そのときのロシアで「革命100年」を感じた唯一の体験と言ってもいいかもしれない）、知人たちの会話でも大きな話題になることはなかった。その一方で、度肝を抜かれたのが5月9日、戦勝記念日の「不死の連隊」パレードだった。対ドイツ戦で命を落とした者たちを追悼するデモ行進は、とりわけ2015年以来規模が膨らんでいるとは聞いていたが、モスクワだけで85万人（ロシア全土で780万人）が参加したという。この行列の持つ迫力は、動画サイト（トヴェーリ通りの一日の人の流れが数分の早回しで見られる）などでぜひ確認していただきたい。まる一日続いたテレビ中継では、親戚や家族の写真を掲げ、「ウラー」を連呼する人たちの中から老若男女が誇らしそうな表情でマイクの前に次々と出てくる。マイクを向けられた小学校低学年ぐらいの女の子が、「私の曾祖父は、～年～月に～戦線で戦いました」とよどみなく答える（うまく答えられない子も時々出てきても、暖かい空気が包み込む）。それぞれの誇りが連帯感を生み出してくる。ともかくも「ロシア国民が一つになっている」印象を強く受けながら、私はニコライ・フョードロフの祖先崇拜や、死者の復活の思想を思い出さずにはいられなかった。『ゲンロン7——特集 ロシア現代思想 II』の「共同討議」において、平松潤奈〔以下、敬称略〕の同様の指摘を読み、この現象が現代ロシア（と伝統）を象徴しているという感慨を深めた。そこであらためて『ゲンロン』での「特集 ロシア現代思想」を読み返してみることにした〔以下、『ゲンロン6——特集 ロシア現代思想 I』を『特集 I』、『ゲンロン7——特集 ロシア現代思想 II』を『特集 II』、両号の特集を合わせて『特集』とする〕。

いささか前置きが長くなったが、まずはそれぞれの号の内容を概観しておこう。国内外のさまざまな書き手（とはいえ、その多くが「1970年代生まれ」、つまりペレストロイカ、あるいはポスト・ソヴィエトの時代に物心がついた世代であることは重要）が、それぞれバラエティに富んだ切り口でポスト・ソヴィエト——ソヴィエト文化の見直しとその大き

な存在なきあとの新たな主体の模索、再主体化というパースペクティブの転換——を論じている。ボリス・グロイスやアレクサンドル・エトキント、スラヴォイ・ジジエクの著書はこれまでも翻訳されてきているが、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチのノーベル文学賞受賞や、その後日本でも刊行された『セカンドハンドの時代』（松本妙子訳、岩波書店、2016年）もまたこの流れを加速させているだろう（ただし、『特集』のように日本との対比にまで思いを巡らせる人はそう多くなかったはずだ）。2017年に刊行されたものでは、アレクセイ・ユルチャクの『最後のソ連時代——ブレジネフからペレストロイカまで』（半谷史郎訳、みすず書房）などもあり、この『特集』でも「記憶」、「遺産」、「過去」を扱ってはいるが、どの論文も視線は前に向かっていく。

現代思想・現代文化に疎い者（というよりも今回の『特集』で、自らの疎さを痛感した次第である）にも、有効な見取り図を示してくれる。先回りして結論じみたことを述べてしまえば、乗松亨平が論文「敗者の（ポスト）モダン」（『特集Ⅰ』）で提示している現代ロシア思想の図（反リベラリズムという立場で、ナショナリズムとコミュニズムが部分的に重なる）および『特集Ⅱ』での上田洋子の解題にある「すべての流派に愛国的アイデアが通底していることを表しているのかもしれない」という記述を羅針盤代わりにしていれば、この知の航海はひとまず漂流することなく乗り切れる（そうした読者を想定しているのか、この図はどちらの号にも載っていてありがたい）。

全体の構成・監修の妙がある。いずれも重厚な論文にいきなりあたると面食いそうだが、どちらの号も「共同討議」が、前提となる歴史・文脈を丁寧に扱っていて間口を広げている。テーマが多種多彩でここでは取り上げられないが、ふたつの「共同討議」だけを読んでも、ロシアの社会・文化における思想の重要性と、ロシア（現代思想）における焦眉の問題を十分に理解できる。

ここからは『特集』の論文をいくつか取り上げておこう。「第四の政治理論の構築に向けて」の著者アレクサンドル・ドゥーギンについては、チャールズ・クローヴァーの大部な著書『ユーラシアニズム——ロシア新ナショナリズムの台頭』（越智道雄訳、NHK出版、2016年）のインパクトもあり、私も新ユーラシア主義や地政学と強く結びつけて理解してきた。こうした者にとっては、今回の論文で取り上げられている彼のリベラリズム・資本主義（第一）、コミュニズム（第二）、ファシズム（第三）のあとの「第四の政治理論」という壮大なスケールの模索はまた新鮮に響いてくる。ただし、乗松の解題によって一定の視界は確保されるものの、向かう先は依然もやもやしている。前述のクローヴァーの著書では歴史学者セルゲイ・チェシコの「マルクシズムは消えた。放り出されたんだ。後にはがらんだりの空き地だけが残った」（239頁）という印象的な言葉が引用されているが、ドゥーギンにとってはその空白を埋めるのがユーラシアニズムではなかったのか。あるいは「模索」の決意そのものに注目すべきなのかもしれない。もう少し見通しがよいのはアル

テミー・マグーンの論文「コミュニズムにおける否定性」で、アンドレイ・プラトーフの小説やアンドレイ・タルコフスキーの映画を例に出しながらソヴィエトの公的空間のアーキーさを描き出そうとし、その否定性を半ば利用しつつ現代における新たなコミュニズムを創出しようとしている。現代ロシアのこうした「もやもや」を体感させることが『特集Ⅰ』の役割と考えてもいいだろう。

『特集Ⅱ』はより理解しやすかった。東浩紀は『特集Ⅰ』を「思想編」、『特集Ⅱ』を「社会・文化編」と呼んでいる。『特集Ⅰ』のマグーンやドゥーギンが「ソ連の遺産を再利用し、新しいアイデンティティをつくろう」（八木君人）と大まかな見取り図を描き出しているのに対して、『特集Ⅱ』の扱う内容はより实际的・具体的で読者もイメージを膨らませやすく、「記憶」という明確なテーマによってそれぞれの論考を関連付けて読み込むことができる。また、『特集Ⅰ』の松下隆志のザハール・プリレーピンを中心に扱った論文と合わせて『特集Ⅱ』の「共同討議」では議論の文脈に合わせて現代作家の作品が紹介されており、ブックガイドとしての側面もある。さらに『特集Ⅱ』では、畠山宗明が「述語の先行性」や「運動」をキーワードにエイゼンシュテインの世界を論じており、思想と芸術のリンクを鮮やかに示している。

マルレーヌ・ラリュエル「運命としての空間」は、空間によって帝国を定義するというコンセプトを、ユーラシア主義やロシア・コスミズムの中に見ていく。「歴史哲学」に対する「地理哲学（ゲオソフィア）」というロシア語の造語が新鮮だ。ヨーロッパが「歴史」にそのアイデンティティを見出そうとするのに対し、ユーラシア主義はそれだけでなく、己を「地理」的にも理解しようとする。終盤では人類の空間的進歩と精神的探究が密接に結びついていることを理解した唯一の国ロシアにおける「ユーリー・ガガーリンの神聖化」の取り組みが紹介されている。そこで私の頭に浮かんだのは映画『ガガーリン 世界を変えた 108 分』（2013）だった。興行収入はあまり芳しくなかったとも聞くこの作品だが、現代ロシアにおける「空間」への希求の一つの現れと考えると、製作の意図が見えてくる。

ラリュエルの空間（地理）に対して時間（歴史／記憶）を論じているのが、この『特集』のクロージングとなるアレクサンドル・エトキントとイリヤ・カリーニンの論文で、写真資料が充実している。まず両論文を翻訳している平松がこの導入部分で、記憶に関して前者が「テロルというソ連の負の記憶」を、後者が「ソヴィエト・ノスタルジー、輝かしい過去」を扱っているという的確な解説によって、二つの論文の敷居は十分に下げられている。エトキントは記憶をソフトとハード、あるいはテキスト・ナラティブと記念碑と二つに分け、その相互作用を強調しながら記憶を残す術について考察している。ロシアにある記念碑は本来設置されるべき場所から外れている、あるいは具体的な説明がないといった批判も分かりやすい。一方で、カリーニンはクリミア西岸のタルンクハルト岬の先に沈んでいるレーニンやマルクスの像の水中ギャラリーを出発点として、ソヴィエトの記憶や遺

産のあらたな利用法についてユーモラスに論じている（ソヴィエト的な場所をめぐる現代の左翼芸術を、「オフィシャル」でも「プライベート」でもない「パブリック」なものの創出という観点から分析する八木の論文「ポスト・ソヴィエト的左翼芸術の闘争」も、基本的には二つの論文と同じ問題意識を共有しているようだ）。ソヴィエト SF の重鎮アレクサンドル・ベリャーエフの小説『水中農民』を引き合いに出すことで（私自身は『両棲人間』を想起したが）、「ロシア革命 100 年」の文脈ともわずかに接続してくる。最後にカリーニンは、「ポスト・ソヴィエト的主体は、失われたものとのナルシスティックな同一化を遂げ、ソヴィエト体制を内部に取り込んだが、ここでのソヴィエト体制とはもはや、指令的な規範体系ではなく、主体の思いどおりになる分解した断片だ」という一文で、ポスト・ソヴィエトの新たな主体化と記憶という二つの問題を重ね合わせ、『特集』そのものが閉じられている。

さて、この『特集』では、現代ロシア思想に対する日本の独特のスタンスに関して二つのことを思った。

第一には、現代ロシアを外から見ているからこそ、それを取り巻く、いわば豊かな霧が感じられることである。ソ連崩壊後、秩序や安定が望まれているその一方で、様々なレベルの言説が噴出し、明確な接点を持たないまま広大なロシア言論界の中で飛び交っている。その湧き上がるダイナミズムを生中継のような心地よさで感じることができた。ロシアでは立場の異なるマグーンとドゥーギンの論文を併載すること自体あり得ず（マグーン本人が当初は困惑していた）、その点においても「現代日本の思想誌による」ロシア現代思想特集の意味は大きい。付言するなら、現代ロシア思想の霧は、その中心にいるウラジーミル・プーチンが一筋縄ではいかないことから一層混沌としてしまう。『特集』をアメリカのオリバー・ストーン監督によるプーチンへのインタビュー（2018 年には書籍版でも刊行されている）と合わせて考えてみるのもよいだろう。だが、ひとまずこの『特集』ではプーチンや政治、宗教、国際情勢に本質的には触れていないことが奏功しており、全体を読み通すと否定神学のようにプーチンの政治も浮かび上がってくるような仕組みになっている。

第二に、帝国主義の歴史である。「歴史をいかに記憶するか」という点で、日本（第二次大戦）とロシア（冷戦）の敗戦が響き合う。2015 年に知り合いの日本研究者から受けた書面インタビューを思い出した。質問の中に「ロシアとウクライナの衝突を日本人はどう思うか？」との問いがあり、それに「日本もロシアと同様に、過去には帝国の経験があるが」という一文が付されていてギクリとしたのだった。乗松は「日本は過去の敗戦を忘却し、安楽な世界を築くことができた。それに対してロシアは、生存の危機に置かれて敗北の痛みを感じつつ、主体性だけを保持・再形成する」と読み解く。こうして、ロシアそのものの流れを考える意識と、それを日本と重ねてより広い意味を持たせる意識とがバラ

ンスよく同居している。この『特集』（あるいは『ゲンロン』誌の持っている、歴史の見直しや観光のテーマ）をロシアの人々がどう受け止めるのかも知りたいところだ。

もしもあと何本か論文を追加できたのであれば、ロシア文化・芸術との接続についても触れてほしかった。文学について言えば、例えばウラジーミル・ソローキンの『親衛隊士の日』をテーマに引き寄せながら、作品内で過去と現在が溶け合うさまを図示した秀逸な解説も『特集』には含まれている。それだけに、その他の作家たちがこのテーマとどのようにかかわってくるのかも知りたい。これまで文壇をけん引してきたヴィクトル・ペレーヴィンやリュドミーラ・ウリツカヤ、タチヤーナ・トルスタヤ、さらに日本でも注目されてきているエヴゲーニー・ヴォドラスキンらやミハイル・シーシキンの活動や思想はどうだろうか。また、『特集』内にたびたび登場するザハール・プリレーピンの紹介（短編「おばあさん、スズメバチ、スイカ」が、沼野恭子訳で『群像』2012年12月号に掲載されている）がさらに進むことも期待している。

読み終えてみると、ソヴィエトの「遺産」や「記憶」とどう対峙していくか、主張は様々あるけれども、ロシアの人々の真摯な態度が強く印象に残った。類似した過去を持つ現代の日本で、彼らの真摯さを看過してはならないだろう。『特集』は、ロシア現代思想の広くて深い世界の入り口を示してくれている。また、「ロシア現代思想」という研究・考察の領域をしっかりと開いた『特集』を称賛したい。